異種の機械人形

御劔剣次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異種の機械人形

【Ｎコード】
Ｎ２５７５Ｂ

【作者名】
御劔剣次

【あらすじ】
私はＭ－１５７。ケーゴ・タチバナに組み上げられた戦闘用二足歩行型機動兵器。だが、他の機動兵器とは違う。私は人間のように『考え』『感情』を持つ機動兵器だ。

私はＭ－１５７

ガガ、ザー……

私はＭ－１５７

型式番号ＭはＭＡＣＡＢＲＥの頭文字らしいが、起動されたばかりの私には意味はわからない。

その後の１５７は、『イチゴーナナ』と読み、それぞれボディ、エンジン、ＡＩの製造番号を表している。１５７ということは、体は初期型、動力は中期ぐらいだ。しかし、ＡＩは、今現在までは『６』までしか製造されていないので最新型というわけだ。

起動したばかりの私の目に映ったのは、うれしそうに喜ぶ白衣の人間が三人。後は鉄製の床と壁、人間達と私を隔てる強化ガラスだけだ。

喜ぶ三人の人間のうち一人が私の足元まで来る。彼は、私が入っているカプセルに取り付けられているキーボードを操作した。

しばらくたつと、私の頭の中に情報が流れ込んできた。マスター、ケーゴ・タチバナ。

どうやら彼の名はケーゴ・タチバナというらしい。私は彼をマスターとして認識した。

『マスター認識、ケーゴ・タチバナ』

私は、私の制御装置の指示に従い、そう言った。

「よし、マスター登録完了っと。もう出てきていいよ」

ケーゴ・タチバナがそう言うと、カプセルの強化ガラスが上に上がり、私はカプセルから出た。

『マスター、ケーゴ・タチバナ、初めまして。私はＭ－１５７です』

制御装置がいちいちうるさいが、逆らう理由がないので従う。どうやら自己紹介というやつをしたらしい。

「うん、初めまして。俺のことはケーゴだけで呼んでくれ。マスターとタチバナはいらない、いいね？」

制御装置が従えと指示してくる。逆らう理由はない。

『了解、ケーゴ』

ケーゴ達はうれしそうに何やら話し合いをはじめた。私は指示を待つ。

ふと考えた。

機械であるはずの私が考えるなど奇妙奇天烈（きみょうきてれつ）といったところだろう。しかし、私は考えている。なぜだろう。

私のメモリにある機械のデータによると、確かに考えはするが、それは制御装置から考えろと指示があったときだけで、自分から進んで考えることなどない。

自分から考えるのは、私のメモリにあるデータによると……

【生きもの】

だけとなっている。漠然としている。

生きものと言っても、色々ある。植物だって生きものだ。

彼らは考えではなく、本能で生きている。単細胞生物もだ。

では、私はいったいなんなのだろう。

生きものでもないのに考えている。

「……そうだな、稼動率は試作機から取ったから実戦データから取るか。Ｍ－１５７」

呼ばれた。反応しろと制御装置がうるさい。私は考えているのだ、おとなしくしていろ。

私は制御装置をＡＩから切り離した。これで私は司令塔を失った。

だが、考えられる。

「おかしいな、どっか故障したか？」

ケーゴが心配そうに私を見てくる。そういえば、彼はマスターだ。一応状況報告をしておかなかければ。

『大丈夫ですケーゴ。ただ制御装置をＡＩより切り離しただけです』

私がそういうと、ケーゴ達は目を見開き私を見つめた。

「嘘だろ？」

ケーゴがぽつりとつぶやいた。信じていないようだ。

困ったものだ。機械は信頼されてなんぼなのだから。

『本当ですケーゴ。私は嘘はついていません』

そう言うと、ケーゴ達はますます驚いた。

「ち、ちょっと頭見せてみろ！」

逆らう理由は、ない。

『了解ですケーゴ』

私は後ろを向いてしゃがむ。ケーゴは私の頭を開き、中の装置を色々と操作している。

「……本当に制御装置が作動してない……」

やれやれ、やっと信じてもらえたようだ。

「……」

どうやら、ケーゴは驚き過ぎて思考が停止したようだ。他の二人も同様だ。

「……ジュディ、上への報告は延ばそう。こいつは調べたほうがよさそうだ」

ケーゴは私の頭を閉じて、後ろの女性に言った。どうやら彼女はジュディというらしい。

「わかったわケーゴ、なんとか誤魔化しておく」

ジュディはそういうと、私に近寄ってきた。

「不思議なコ……」

ジュディは私を一撫ですると、名残惜しそうにこの部屋を出た。

「さて、明日からまた忙しくなるぞ……。Ｍ－１５７、この部屋からは出ないように、いいね？」

本当は外の世界とやらを見てみたかったが、ケーゴの命令だ、従う。

『了解ですケーゴ』

不思議と、制御装置が言うよりもケーゴの言葉はうるさくなかった。

ケーゴは残りの白衣の男と一緒に部屋を出た。

せっかく静かになったので、私はなぜ考えることができるのかを考えてみよう。

答えは永久に出てこないような気がするが……

まったく、人間は……

私はＭ－１５７

昨日から八時間十五分が経過した。

考えるというのは楽しい。考えても考えても、また新たな疑問が生まれる。

マスターのケーゴが部屋に入ってきたから、『考え』の途中経過をメモリに保存しておこう。

「やあおはよう。調子はどうだい？」

『おはようございますケーゴ。調子はいいです』

明るくあいさつをしてくるケーゴ。昨日の驚いた様子が嘘のようだ。

そういえば、ジュディともう一人の男がいない。

『ケーゴ、あの二人はどうしたのですか？』

気になった私が聞くと、ケーゴは一瞬驚き、すぐに表情を戻した。

「ああ、ジュディとミハイルか。あいつらはまだ睡眠中だ」

ということは、ケーゴは早めにここに来たという事か。

「あら、私はもう起きてるんだけど」

ジュディが鉄の扉を開けて入ってきた。ここの扉は防音性に優れていないらしい。

「おはよう、Ｍ－１５７」

ジュディは笑顔で私に言った。

『おはようございますジュディ』

私があいさつを返すとジュディはうれしそうに笑った。何がうれしいのだろう。

「ねえケーゴ、この子に名前をあげなきゃね」

ジュディはケーゴの横に並び、身長が６０ｃｍほど違う私を見上げる。

「名前、ねぇ」

ケーゴも私を見上げる。

名前。人間が生まれたときに付けられるものらしい。『考え』の参考にするためにつないだネットワークのデータにそうあった。

私達機械でいえば、型式番号の横に付く愛称と同じだ。

人間というのは、名前を付けるのが好きな生きものなのか。

「ジバ、なんかどうだ？」

突然扉が開き、ミハイルが入ってきた。本当にここの扉は防音性がないようだ。部屋の外に筒抜けだ。

「ジバ？　ヘンテコリンだなおい」

ヘンテコリン？　初めて聞く言葉だ。私のメモリにも登録されていない。

今度ネットワークに繋いで調べてみるか。

三人が話し合いを始めた。楽しそうに話し合っている。

話の内容を聞いていると、どうやら私の名前を考えているらしい。

「よし、じゃあ今日からジバだ！」

話はまとまった。結局ジバになった。

それにしても、ミハイルはジャンケンが強い。

「しょうがない。今日からおまえはジバだ」

『わかりましたケーゴ。私は今日からジバです』

ケーゴは半ば納得いかない様子であるが、決まってしまったもの

は仕方がない。

「よし。じゃ、まずは稼動性能をチェックするか。付いてこいジバ」

『わかりました』

ケーゴは私を引きつれて部屋を出た。後ろに二人が続く。

私は初めて部屋の外に出た。ここは廊下という、部屋と部屋を繋ぐ道らしい。

「二足歩行には問題無し、と」

ジュディが何やら手元のボードに何かを書き込んでいる。まあ、何でもいいが。

曲がり角を左に曲がる。次に右だ。

「左右方向転換異常無し」

ジュディが再び書き込んでいる。これは予想だが、どうやら私の動きに異常が無いかどうかを調べているのだろう。

しばらく歩くと、ケーゴは一つの扉の前で止まった。

扉を開けて中に入るケーゴ。私と後ろの二人も続く。

「よし、歩行に問題はないな」

「ええ、問題無しよ」

ケーゴはそうかとうれしそうにうなずくと、私のほうを見た。

「じゃ、始めますか」

最後の検査を終え、結果を見ている三人。色々と検査結果について話し合っている。

私は『考え』の続きをしようと、メモリ内からデータを引き出した。

「二足歩行で、しかもＡＩチップだけでここまでとは……」

ミハイルの声だ。

そうだ、私はいったいなんなのかわかるかもしれない。彼らの話を聞いてみよう。

「確かに、信じられるものではないわね」

「こいつはまさか……」

ケーゴが何かを言いかけてこちらにきた。

『なんでしょうかケーゴ』

「ジバ、おまえの好きなことは？」

ケーゴがこう質問すると、後ろの二人は驚いた顔をする。

『考えることです』

私がそう答えると、三人はさらに驚いて私を見る。

「じゃあ、今は何がしたい？」

『外に出てみたいです』

三人は驚いて口を開けている。これがネットワークで見た『開いた口が塞がらない』なのだろうか。

「……出してみるか」

ケーゴがそう言うと、後ろの二人は反対した。

「まあまあそう言わずに」

「まあまあそう言わずに、じゃないぞ！　だいたいなー……」

「それになんのために……」

あれから十二分と三十二秒が経った。秒は常に進むのであまりあてにはならないが。

「とりあえず一回だけ。上にもこの結果を報告して、模擬戦データを取るって言えば問題ないだろ」

「はぁ、隠せって言ったのはあなたよ。……もういいわ、反対するだけ無駄ってわかったから」

ジュディが反対から賛成に回ったようだ。

「げ、ジュディが寝返った……あー、わかったよ！　俺も賛成するよ！」

結局、ミハイルも賛成にまわり、私は外に出られることになった。

まったく、人間はおもしろい。

さまざまな『個性』がある。私のこの考えも『個性』なのだろうか。

また新しい『考え』の題材が出来た。

これが、外……（前書き）

前回の数時間後

これが、外……

私はＭ－１５７

いや、今日からジバだ。

「……ふむ」

大きな机に肘をついて、資料と私を交互に見る老人。彼はデリンジャーというらしい。

「わかった、演習地での模擬戦を許可する。いい結果を待っているぞ」

デリンジャー中将は資料を机の上に置いた。視線は私に向けられている。

「はっ！　ありがとうございます、デリンジャー中将殿！」

ケーゴはそう言って敬礼をした。私もしなければならないらしいので、敬礼をする。

「では、失礼します！」

ケーゴは背筋を伸ばして歩く。私もする。

再び敬礼をしてから部屋を出た。機械ながらに面倒だと思えてしまう。

「よかったなジバ、外に行けるぞ」

『はい、ありがとうございますケーゴ』

本当にありがとう。

「よし、じゃあ模擬戦闘を始めるぞ。ジバを出せ」

ミハイルの声とともに、私の視界に光が差し込む。今まで移動用トラックの中にいたのだ。窮屈で暗い。

これから、外の世界を見られる。これが人間でいう『ワクワク』なんだろうか。

「ジバ、これが外だ」

ケーゴは私の横に並び、そう言った。

素晴らしい。これが、外というものか。

今までの鉄の部屋とは違い、周りは一色ではない。

緑の床に青の天井。壁などは存在せず、どこまでも限りなく続い

ている。

緑の床は草原といい、青の天井は空というらしい。ネットワークで外の画像を見たが、それ以上に美しい。

さらに観察すると、実験動物ではない野性の動物達がたくさんいた。

「自然観賞してるところ悪いが、そろそろ始めるぞ」

ケーゴが私に不粋なものを付けながら言った。仕方がない、これが本来の目的なのだから。

『質問がありますケーゴ。模擬戦闘を終わらせたあとに時間はありますか？』

それが気になって仕方がない。私の本来の目的は外を楽しみ、『考え』の題材の一つにすることなのだから。

「ああ大丈夫だ。時間は日が沈むまである。だから、さっさと終わらせよう」

ケーゴは嘘をつかない。だとすれば、私が外にいられる時間は約七時間ある。

早く終わらせれば、この不粋な『機動銃』を取りのぞき、考えることが出来る。

「標的、機動確認。数、六機」

ミハイルがモニターを確認していった。さてと、行くとするか。

『戦闘開始』

私は足裏に付けられたジェットローラーで大地を滑る。

しばらく進むと、木の裏にうごめくものがあった。間違いなく標的だ。

『ロック』

照準に捉え、機動銃を放つ。この作業に一秒もいらない。

『撃破確認』

標的はそこに植えていた木と一緒に吹き飛んだ。私はすぐさま照準機能を調整した。

こんどは木を吹き飛ばすまい。

『標的二つ捕捉、ロック』

機動銃を二度振動させる。今度は木を吹き飛ばすことなく標的を撃ち抜いた。

『標的残存数、残り三』

残りの標的はレーダーには映っていない。

考えられるのは二つ。一つは、相手は電子戦機である。もう一つ

はどこかに身を潜めているかである。

これは模擬戦なので、前者は考えにくい。電子戦機はコストが通常の倍以上かかるからだ。

だとすれば後者か。厄介な。

私は岩の影に隠れた。うかつに動けば逆にやられてしまう。

標的は弾を撃つ代わりにペイント弾を撃ってくる。あたった箇所は自分で機能を停止し、実際の戦場と同じ状況にする。

私は岩の影からレーダーワイヤーを延ばし、辺りを探る。

ワイヤーは自由に動かせるのでアンテナ式より性能はいいが、消費電力が大幅に高くなっている。

『標的、捕捉』

どうやら、三時の方向四百メートルの地点にある岩の後ろに隠れているようだ。向こうは私を見失い、あわててアンテナを広げているようだ。

機械があわてるなんて表現、我ながら滑稽に思える。

私は機動銃の効果範囲を絞るためにロングバレルを装着した。これにより、貫通能力が上がる。

『ロック』

私の放った銃弾は見事に岩を貫き、標的のメインエンジンを貫いた。

『残り、二』

私は岩影を飛び出し、走った。どうせワイヤーを伸ばしたところでエネルギー切れで動けなくなるだけだ。ならばわざと相手に撃たせて、その弾道を辿って発見したほうがましだ。

予想通り、標的は私目がけて撃ってきた。予想外はと言えば、それが十字砲火だったということだ。

一機は木の上、もう一機は土の中か。

『右腕、ダメージ。機能停止』

これくらいは想定の範囲内だ。私は迷わず右腕を切り離し、土の中の標的に接近した。もちろん正面からではなく、上空に跳躍した。

標的は一瞬私を見失う。それが戦場での生死を分ける。

『パイルヴァンカー発動』

ガキィン！

鋭い金属音が響き、私の左腕に内蔵されているパイルヴァンカーが標的を貫いた。

『残り、一』

あとは木の上で弾幕を張っている標的を落とすだけだ。パイルヴァンカーのストッパーを解除し、標的目がけ放つ。

飛び出した鉄杭は標的を貫き、標的は爆発した。

『ミッションコンプリート』

私は全機撃破を確認したあと、帰投した。

「やるじゃないか！　いい成績だよ、本当に！」

『ありがとうございますケーゴ』

ケーゴが私を誉めた。ジュディとミハイルも目を見張っている。

「命中率百％、信じられないな、こりゃ」

ミハイルは苦笑いしながら私を見上げる。

「タイムは三分二十二秒、本当にすごいわ。最速記録よ」

ジュディは記録装置の画面を見ながらつぶやいた。私はどうやらすごいことを成し遂げたらしい。

「よし、データは取り終わった。ジバ、待ちに待った自由時間だ」

ケーゴは笑って私の肩を叩く。私はケーゴに礼を言い、立ち上がった。

ああ、外だ。

夢にまで見た、と人間ならそう例えるだろう。それほど待ちわびたのだ、私は。

風を速度測定装置で感じる。風速０．二メートルなどと表示が出る。邪魔なのですべての計算機能を停止させる。

これで私は人間に近い感覚で自然を感じることができる。小鳥のさえずりもヘルツやデシベルで表示されることもない。

いつしか空は茜色に染まっていた。西の方角を見ると、真っ赤な夕日が地平線へと沈んでいく。

心が温まるとは、このような感覚なのだろうか。

同時にもの悲しさも憶えた。ああ、もう戻る時間なのか、と。

私は……（前書き）

前回から一週間ほど後

私は……

「そんな馬鹿な……まだ実用段階じゃない！」

私が音声認識機能をオンにしたときに、最初に聞こえたケーゴの言葉だ。

「まったく、何を考えてるんだ上は！」

どうやらケーゴはミハイルに怒鳴り散らしているようだ。ミハイルは下を向いている。

「俺に当たられても困る……」

ミハイルは眉をひそめている。

いったいどうしたのだろう。

『ケーゴ、何かあったのですか？』

私が尋ねると、ケーゴは私の方を向き、すぐに視線を逸らした。

「ジバ……実は……」

「あなたの実戦配備が決まったのよ」

渋るケーゴの代わりにジュディがそう答えた。

私が、実戦配備……。

「まだジバは戦える状態じゃない……」

ケーゴは下を向きながら言った。今まで、こんなに暗いケーゴを見たことがない。

「あら、ジバの戦闘能力は実戦でも十分に通用するものよ」

ジュディがそう言うと、ケーゴが顔を上げてジュディに掴み掛かった。

「ジュディ、どっちの味方だ！」

ケーゴが怒鳴ると、ジュディは冷たい目をしてケーゴを見た。

「私は現実主義なの。だから事実しか見ないわ。それで私から言わせれば、ジバは十分に通用するのよ」

ケーゴは納得の行かない様子でジュディを放した。

「オレの味方は居ないのかよ……」

ケーゴは拳を強く握り、震えながらつぶやいた。

ケーゴ……

「気分はどうだジバ？」

『あなたこそ、ケーゴ』

私が聞き返すと、ケーゴは顔を背けた。

「……これから実戦だけど、おまえはどう思う？」

ケーゴは足元を見ながら聞いてきた。

『それは私の機械的な部分に聞いているのですか？　それとも『私』に直接聞いているのですか？』

そう聞き返すと、ケーゴはしばらく考えた。

「……おまえに、だ」

『私としては、嫌です。相手は、演習用の動く人形ではない、生きた人間なんですから』

私がそう言うと、ケーゴ、ミハイル、ジュディの三人は驚いた顔をした。

「生きた人間、ねぇ」

「生きた人間、かぁ」

ジュディとミハイルが同時に言った。ケーゴはやっと顔を上げて私を見る。

「そうか……生きものを殺すのは嫌か……」

私がうなずくと、ケーゴは微笑んだ。

「じゃあ、殺さないように戦うといい」

ケーゴはそう言うと、涙を一筋流した。私はその涙を見た途端、苦しい感じに襲われた。

私が苦しいと感じるとは、おもしろいやら悲しいやら。

「そろそろ到着するわ。……頑張ってらっしゃい、私達のかわいい

息子……」

ジュディは言い終わると顔を伏せた。泣いているようだ。

ミハイルは泣くまいと耐えている。彼は機械を操作して入り口を開けた。

「……ジバ、ちょっと頭をだせ」

そう言われ、私はしゃがんでケーゴに頭を見せた。ケーゴは私の頭を開き、データを改竄(かいざん)した。

［マスター、ケーゴ・タチバナ、登録解除］

『ケーゴ……』

「いいか……逃げろ！　この戦いが終わったら戻ってくるな。戻ってきても、また嫌な戦争をさせられるだけだ」

ケーゴはそう言うと、私の頭を閉じた。

「おまえはソーラーチャージができるからエネルギー切れの心配はない。どこか別の国にでも山にでも逃げ込んで、『考え』をゆっくりやるといい。野生動物の観察なかんかも、時間を気にしないでできるぞ」

ケーゴは震える声で私に言った。私はケーゴの顔を見ることができなかった。

つらい。

ケーゴ達と別れるのも、戦いをするのも。

こんなことなら、私は普通の機械として作られたかった。

「さあ行け！」

ケーゴは力一杯に私に言った。私は三人の顔を見ないように、移動用トラックから飛び出した。

彼らの顔を見たら、ケーゴの言ったことを守れそうにない気がしたからだ。

さようなら、ケーゴ。

さようなら、ジュディ。

さようなら、ミハイル。

そして……

さようなら、私の感情。

さようなら、私の今までの記憶。

さようなら、ケーゴ達と過ごした時間。

さようなら……

私は、ＡＩの『私である』部分を切り離した。

戦いをするのに、感情は邪魔だ。

ケーゴ、あなたが作り上げた『私』という兵器は最高傑作であるということを、敵のゼネイル帝国に見せ付けよう。

私は……わたしは……ワタシハ……

シ　ア　ワ　セ　ダ　ッ　タ　ト　オ　モ　・　・　・　・　・

・――――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2575b/

異種の機械人形

2010年11月18日21時12分発行